注解『七十一番職人歌合』稿（三十二）

下房俊一

凡例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第六十七番および第六十八番の注解を収めた。

六十七番　比丘尼　尼衆

〔職人尽〕

〔吾吟我集〕比丘尼を　年わかきびくには髪をすり衣墨にそめても心みだれん　〔古今夷曲集〕そり落としかしら虱はなきとても臍より下はいかにお比丘尼＜雄長老＞　〔訓蒙図彙〕　尼（に）　あま。比丘尼（びくに）也。尼姑（じこ）、女僧（ちょそう）、並同。　〔人倫訓蒙図彙〕比丘尼　律戒の尼をいふ也。　〔春駒狂歌集〕びくにによる恋といふを　すげ笠のふかく思へどあま君はうすあさぎなる色の道中　〔誹諧職人尽〕びくに　あつらへて折るや比丘尼の鑰わらび＜休甫＞　みるぶさはかかれとてしも寺の尼＜嵐雪＞　女中がた尼前ははなの先達か＜同＞　枯れ菊の名のみ残るや松が岡＜谷水＞　すた髪は糸の柳や松が岡＜蓮尺＞　帰るさの阿武に萩の風凄し＜知圭＞　弟子あまの汲むや若水若菜摘み＜寥和＞　／　にしう　尼達の手染めは薄し燕子花＜乙由＞　古き付句　さまを恨みてなりし尼寺　煩悩の犬や土にて作るらん　秋の夜や勤めの隙の土小犬＜寥和

〈〔江戸職人歌合〕　左　（寄）比丘尼（恋）　忍ぶ夜は風の音にも比丘比丘尼観音経を胸にたたみて　左、忍ぶ山又ことかたの道もがな、と兼好が詠めりしごとく、かうさまに忍ぶの文字をとりなしても詠むべし。此の歌、人目をはばかりいとふさま、よろし。……左を勝と申すべくや。

【本文】

六十七番

いつゝしやこねん寺かけてみわたせは
京しら川にすめる月かけ
初夜中や後やのつとめのひまなさに
みるとしもなき法花寺の月

左右ともに、我寺〻をいひたてたれと、させることなし。されと、左は、月をひろくよめり。右は、月をもてあそふ心すくなし。すこしは左まさるへくや。

ほんしやうをつくさむとこそおもひしに
へちにしやうけのおとこおそろし
おとこより手わたしにこそとらねとも
つゐにわれらをおとしふみゝつ

左右ともに、ひしりの恋はしかるへから
ねとも、題によりてよめれは、さも侍へし。
みなけさう人の侍るをあらはせり。さんけ

みわたせは―〔白〕みわたせ〔類〕見わたせは
しら川―〔類〕白川　月かけ―〔類〕月影

もてあそふ―〔類〕翫ふ

左―〔尊〕ナシ
ほんしやう―〔類〕本性　つくさむとこそおもひしに―〔類〕つくさんとこそ思ひしに
おとこ―〔類〕男　おそろし―〔忠〕をそろし
おとこ―〔類〕男
われら―〔類〕我ら　おとしふみゝつ―〔類〕落し文みつ
しかるへからねとも―〔類〕しかるへからすとも
侍へし―〔類〕侍るへし

に罪あさくや。可為持。

◇　　◇

ひくに

二

仏弟子は、大かたみなさこそ候へとも、御尼衆も、きけんかいといふ事はおほせ候めるは。我らは、つとめ行法はおなし事にて候。させんくふうはおなし御ことにては、よも、候はしな。

四

それは、よも、けうけへちてんにては候はし。

にしう

一

御ひくにも、かいもんはまもらせ給候なれとも、なとかおんしゆをは、御やふり候そ。

三

我らも、くわん念と申すは、

ひくに－〔白〕比丘尼〔忠〕六十七番ひくに

二－〔白〕ナシ

尼－〔白〕尼　きけんかい－〔白〕機嫌戒　事はおほせ候めるは－〔白〕〔明〕〔類〕事は候めるは〔忠〕事候はめるは

我ら－〔白〕われら　おなし事にて候。させんくふうは－〔白〕ナシ

御ことにては－〔忠〕御ことにて

四－〔白〕ナシ

それは、よも、けうけへちてんにては候はし－〔白〕ナシ

一－〔白〕ナシ

御ひくに－〔白〕御比丘尼　かいもん－〔白〕戒文

給候なれとも－〔忠〕給はなれとも〔明〕給ひ候なれども〔類〕給ふなれとも　なとか－〔白〕なとや　おんしゆ－〔白〕おん酒　〔類〕をんしゆ

〔白〕（「御やふり候そ」ニ続ケテ）其はよも教外別伝にては候はし

三－〔白〕ナシ

我ら－〔白〕我等　くわん念と申すは－〔白〕観念と申も〔明〕くはん念と申すは

さにてこそ候へ。

〔語注〕

◎比丘尼は、本来、尼僧一般をいうが、ここでは、特に禅宗の尼僧の意で用いているらしい。月の歌に、尼五山の一つ「護念寺」を詠み、恋の歌に『伝燈録』の言葉を踏まえた表現（この表現は、六十四番禅宗の恋の歌の表現と酷似する）を用い、また、画中詞にも「座禅工夫」、「教外別伝」の言葉が見える。

尼衆も、本来、尼僧一般をいう言葉であるが、ここでは、月の歌に、西大寺流律宗の尼寺「法花寺」を詠んでいることから、特に律衆の尼僧の意で用いているらしい。また、画中詞に見える「観念」は、六十四番律宗の月の歌に詠まれた「観念の月」との関係を思わせる。

比丘尼・尼衆が、それぞれ禅宗・律宗の尼僧の意であるとすると、この番いは、六十四番の禅宗・律宗の番いの尼僧版ということになる。歌・画中詞の類似性とも合わせて、興味深い。

◎**いつゝしや**　「五辻」は、現京都市上京区五辻町・西五辻東町付近にあたると思われる地名。護念寺（次項参照）に近い。なお、護念寺と並んで尼寺五山の一とされる景愛寺も五辻にあった（応仁の乱で焼失）。「や」は、和歌の初句にしばしば用いられて、場面を提示する詠嘆の助詞。

◎**こねん寺**　護念寺。現京都市上京区六軒町今出川下ルにある寺。もと禅宗の尼寺で、尼寺五山の一として栄えたが、応仁の乱で衰退した。（慶長年間に再興され浄土宗に改宗。）本歌合成立当時の実態は不明。

◎**かけて**　「～（を）かけて」という形で、～の場所をまで含んで、の意。「松浦がたもろこしかけてみわたせばさかひは八重の霞なりけり〈後鳥羽院〉」（風雅集、春歌上）などと、歌にしばしば用いられる。

◎**みわたせは**　白石本は、「みわたせ」と「は」を脱するが、誤脱であろう。

◎**しら川**　白川・白河。現京都市左京区の地名。比叡山麓より流れる白川の流域のうち、およそ、鴨川と東山の間で、粟田口の北、北白河以南をいう。古くから開けた地であったが、院政期ころから急速に開発が進んだ。京の都の東郊に

あたり、洛中と合わせて「京白川」と併称されることが多かった。ここもその例。「白」に、月が白く輝く意を響かせるか。

◎**初夜中や後や**　初夜、中夜、後夜。仏教で一昼夜を六分したうちの、夜の三つの時間帯。また、それぞれの時に行う勤行。

◎**法花寺**　法華寺。現奈良市法華寺町にある寺。光明皇后の開基で、大和国国分尼寺として諸国の国分尼寺を統括したが、平安後期に荒廃、鎌倉中期に西大寺流律宗の尼寺として復興した。明応八年（一四九九）および永正三年（一五〇六）の兵火により、堂舎の大半が消失した。

◎**月をひろくよめり**　「京白川に澄める月影」と、広大な地を照らす月光を詠んだことをいう。

◎**月をもてあそふ心すくなし**　「もてあそぶ」は、愛で楽しむこと。「見るとしもなき法花寺の月」という歌は、月を愛で楽しむ心が浅くて、題意にかなっていない、というのである。

◎**左まさるへくや**　尊経閣本は、「左」を脱するが、誤脱であろう。

◎**ほんしやうをつくさむとこそおもひしにへちにしやうけのおとこおそろし**　「ほんしやう」は、類従本は「本性」。『伝燈録』十四、龍潭崇信の章に見える、道悟が崇信に与えた言葉、「但尽凡情、無別聖解」を踏まえた表現か。ただし、当時、「本性（生）を尽くせ、別に障碍なし」とする、誤伝ないし誤解が一般化していたかもしれない。その場合も、「本性（生）」は「凡情」（凡夫の迷い）に近い意で理解されていたか。「障碍」は、仏道の妨げ、障害。六十四番禅宗の恋の歌に、ここと酷似する表現があった（六十四番語注「恋しさのたゝほんしやうをつくさねはへちに障导のなきはなきかは」の項参照）。迷いの心を捨て去ろうと思っているのに、一方で、その障害となる男がいて、そのことが恐ろしい、というのであろう。

◎**手わたし**　手渡し。勿論、俗語。

◎**つゐにわれらをおとしふみゝつ**　「つひに我らを落とし」から「落とし文見つ」と続く。「われら」は、単数の自称代名詞。「落とす」は、僧などを堕落させること。「落とし文」は、相手の目につくようなところに落としておく手紙。

◎**ひしりの恋はしかるへからねとも、題によりてよめれは、さも侍へし**　「しかるへからねとも」は、類従本は「しかるへからすとも」とするが、誤写であろう。「聖」は、僧一般を指す言葉。僧の恋はあってはならぬことではあるが、「恋」という題に従って詠んだのであるから、このような内容の歌になるのもやむをえない、というのである。

◎**けさう人**　懸想人。用例は管見に入らぬが、恋をしている相手、と取ってよかろう。

◎**さんけに罪あさくや**　「懺悔」は、犯した罪を悔い、仏や師の前などで告白すること。そうすることによって罪が消滅するとされた。ここは、懺悔したのだから罪も浅くなるだろうか、というのである。

◎**二**　白石本は、この記号を欠く。以下の「四」、「一」、「三」についても同様。会話の順序を示す記号（以下同様）。

◎**仏弟子は、大かたみなさこそ候へとも**　「仏弟子」は、釈迦の弟子の意で、仏教を信奉する者をいう。仏弟子たるものは概してみな戒文（門）は守るべきものであるが、というほどの意であろう。

◎**きけんかいといふ事はおほせ候めるは**　「事はおほせ候めるは」は、白石本・明暦板本・類従本は「事は候めるは」、忠寄本は「事候はめるは」とするが、いずれも誤脱であろう。「譏嫌戒」は、人から譏られ嫌われる行為を禁じる戒。たとえば、肉を食せず、酒を飲まず、歌叫伎楽の声を聴かず、などの戒の総称。譏嫌戒ということを口で言うだけで実際に守ってはおられないではないか、と非難するのであろう。

◎**我らは、つとめ行法はおなし事にて候**　白石本は「おなし事にて候」から次項の「させんくふうは」までを欠くが、誤脱であろう。われわれ比丘尼が勤め・行法をすることは、あなたがた尼衆と同じであるが、の意であろう。

◎**させんくふうはおなし御ことにては、よも、候はしな**　「御ことにては」は、忠寄本は「御ことにて」と「は」を脱するが、誤脱であろう。「座禅工夫」は、座禅に専念すること。われわれが重視する座禅を、あなたがたは軽視している、というのであろう。

◎**それは、よも、けうけへちてんにては候はし**　白石本はこの言葉を欠く。「けうけへちてん」は、「……べつでん」とも表記する。教外別伝。（六十四番語注「けうけ別伝と申候は、なとや祖師とは仰候そ」の項参照。）

◎**かいもん**　白石本は「戒文」。「戒文」は戒律の条文。ただし、ここは「戒門」とも取れる。「戒門」は、戒律ないし

戒律についての教え。

◎**まもらせ給候なれとも**　「給候なれとも」は、忠寄本は「給はなれとも」、類従本は「給ふなれとも」とするが、いずれも誤写であろう。

◎**なとかおんしゆをは、御やふり候そ**　「なとか」は、白石本は「なとや」とし、「や」の右に「か」と校合。「飲酒」は「不飲酒戒」のこと。出家が守るべき十戒の一。酒を飲んではならないとする戒。当時、比丘尼が不飲酒戒を破ることが常態化していたか。この言葉の後に、白石本は「其はよも教外別伝にては候はし」。

◎**我らも、くわん念と申すは、さにてこそ候**　「申すは」は、白石本は「申も」とあるが、誤写であろう。「観念」は仏教語で、雑念を退けて諸法の真理を見、心にとどめること。われわれ尼衆が重視する観念ということは、あなたがた比丘尼のいう座禅工夫に劣らない、というのであろう。なお、六十四番律宗の月の歌にも、「観念の月」が詠まれていた。

〔絵〕

比丘尼は、頭巾を被り、僧衣の上に烙子（らくす）を懸け、左手に数珠を持つ。

尼衆は、僧衣の上に袈裟を懸け、襟帽子をつける。

〔参考〕

○ヨーロッパでは、修道女の修道生活および（世俗からの）隔離は厳重かつ厳正である。日本では、比丘尼（ビクニ）の僧院はほとんど娼婦街となっている。（日本覚書、二）

○われらにおいては、通常、修道女はその修道院から外出しない。日本の比丘尼（ビクニ）はいつも遊興に出かけ、ときには陣立（ジンダチ）に行く。（同）

六十八番　山法師　奈良法師

〔職人尽〕

〔人倫訓蒙図彙〕法相宗　天竺護法菩薩にはじまる。外にさまざまの説あり。日本にては、玄昉僧正入唐して渡す也。人皇四十代天武天皇白鳳廿年庚辰に、諸宗一番にわたる也。もちゆる経は、解深蜜経、大品経等也。論は、喩伽論、唯識論なり。寺は、興福寺也。　／　天台宗　天竺恵文禅師、南岳恵思大師、天台智者大師等の所立也。日本にては、桓武天皇の延暦廿年乙酉に、七番に渡る。伝教大師、是を興す。用ゆる所、法花経并釈天台三大部等也。〔誹諧職人尽〕　山法師・奈良法師　五月雨や水にごるかも山法師＜沖而＞　さざなみや鎧の下の更衣＜米仲＞　芳野ともさくらに意地や山法師＜東風＞　煤掃きの出立ち栄ありやま法師＜寥和＞　いにしへ、ならの八重桜を上東門院、九重へ移し給はんと有りしに、衆徒甚だ惜しみ、強ひて訴へければ、却つて、花をおしむ風流を感じ思召し、其のままをかせられ、桜に庄園を寄せられける、といへり。　強訴訟どつとほめたり八重さくら＜桃兆＞　三日月や鑓の師匠の罔両＜祇丞＞　法師原氷にすべる般若坂＜仙泉＞　八郎が扇でさすや奈良法師＜寥和＞

〔江戸職人歌合〕右　（寄）山法師（恋）　邪婬戒破りし恋の山法師髪より先へ立てる名ぞうき　……右、下の句よろしけれど、猶、左勝と申すべくや。　／　右　（寄）奈良法師（恋）　花と見し君の心のなら法師待ちてはくれぬ情けなきもの　……右、結句は、桜ををしめるをほめ給ひしふることながら、今すこし前後たらはぬここちし侍り。左可為勝。

【本文】

六十八番

三の寺ふもとまてたにをよはめや

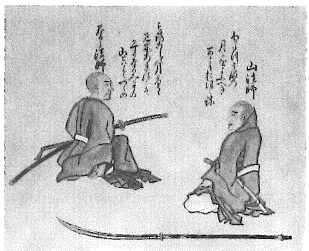
わかやますみの月のたかさに
さんろむの御のりのまともあきらかに
みなみにめくる法相のつき

左は、四大寺の中に我山に及かたきといひ、右は、南都の月をほめたり。法に是非を申かたし。可為持。

ひえあかるわかひとりねのとことはに
いちゝこならぬ人そこひしき
こひしさにおこなふへきもわするれは
わかとくこうのほとそしらるゝ

左、一ちこ二山王といふ事、よく思よせたり。右、なら法師は得業になるゆへにや。されと、たゝこうにこそ侍れ。とくはいまより所なきにや。以左為勝。

◇　◇



山法師
わかたつそまの
月にをよふへき
所こそおほえね。

なら法師

わかやますみ－〔類〕我山住　たかさ－〔類〕高さ
さんろむの御のりのまともあきらかに－〔類〕さん論の御
法の窓も明らかに
みなみ－〔類〕南　つき－〔類〕月

法に－〔類〕共に

わかひとりね－〔類〕我独ね
こひしき－〔類〕恋しき
こひしさ－〔類〕恋しさ　おこなふ－〔類〕をこなふ
わか－〔類〕我　ほと－〔白〕ほう
事－〔類〕こと

いま－〔類〕今

山法師－〔明〕六十八番山法師
わかたつそま－〔白〕わか立杣
をよふ－〔白〕およふ
おほえね－〔白〕おほへね

なら法師－〔白〕奈良法師

もろこしの月よりも
見所あれはこそ、
かすかなるみかさの
山とはよみつらめ。

もろこし―〔白〕唐
かすか―〔白〕〔類〕春日　みかさの山―〔白〕三笠のやま

〔語注〕

◎山法師は、天台宗総本山、比叡山延暦寺の衆徒。
奈良法師は、奈良の大寺、ことに法相宗大本山、興福寺の衆徒。ここも、月の歌に「法相」とあることから、興福寺の衆徒と見るべきであろう。
延暦寺と興福寺は、教義上のみならず、世俗的な事件においても対立抗争をくり返した。

◎**三の寺**　四大寺（「四大寺」の項参照）のうち、延暦寺を除く三寺を指す。

◎**ふもとまてたにをよはめや**　用例は管見に入らないが、はるかに及ばない、というのであろう。下句の「山」の縁で、「麓」という言葉を出す。

◎**わかやますみの月のたかさに**　「山住み」は、比叡山すなわち延暦寺に住むこと。四大寺のうち、延暦寺のみが山地に、他の三寺は平地にあるので、延暦寺で見る月がもっとも高い、というのである。そのことに、延暦寺自体が他の三寺より勝っている意を響かせる。

◎**さんろむ**　三論。龍樹の『中論』『十二門論』、および、その弟子提婆の『百論』の三つの論。「一切法空」（あらゆるものは空であるとする考え）を説く（岩波仏教辞典「三論」の項）。三論宗の依所とする聖典。三論宗は、奈良時代には盛んであったが、次第に衰微、平安時代に東大寺内に東南院が建てられ、三論宗の本所となり、室町時代中期には、英憲・英訓の学匠が出るなどしたが、衰退の一途をたどった（国史大辞典「三論宗」の項）。ここは歌の作者として、東南院の学匠を想定しているかとも見られるが、下句に「法相」とあるから、興福寺の僧とするのが妥当であろう。時

代は逆上るが、院政期の興福寺大衆が自らを「三論法相之学徒」と捉えていたことが、『玉葉』に見える（『大系』付録）。

◎**御のりのまと**　御法の窓。世の中を照らす仏法を、光の射し込む窓にたとえた言葉か。「のりのまどに君がかかぐるともしびはいでむあさ日のかげにつたへむ＜阿闍梨経乗＞」（詠十首和歌）の用例がある。

◎**みなみにめくる**　月が南に巡る意に、法相の月（次項）が南都（奈良）に輝く意を掛ける。

◎**法相のつき**　法相宗の教えを月にたとえた言葉。

◎**四大寺**　東大寺・興福寺・延暦寺・園城寺の四寺。朝廷の祈願所として格が高かった。

◎**法に是非を申かたし**　「法に」は、類従本は「共に」とするが、誤写であろう。教義上のことについては優劣をつけることができない、というのである。実は、歌としての優劣がつけがたいのであるが、冗談めかして、こういう言い方をしたのである（六十五番語注「法の優劣を論すへからす」の項参照）。

◎**ひえあかる**　「冷え上がる」の「冷え」に、「比叡」ないし「日吉」を掛ける。

◎**わかひとりねのとことはに**　「我が独り寝の床」から「とことは（常）に」と続く。この掛詞は、「見せばやなわがひとりねのとことはに涙ほしえぬ夜半のさ莚＜行輔＞」（延文百首、恋）など、和歌にしばしば用いられる。

◎**いちゝこならぬ人そこひしき**　「一稚児」は、判詞にもいうとおり、「一稚児二山王」という諺から出た言葉。比叡山の僧は、日吉大社の祭神である山王権現よりも、男色の相手である稚児を大切にする、ということ。「一稚児ならぬ人」は、すなわち、女の恋人。寺院において男色は黙認されていたが、ここは、男色ならぬ女色に心を奪われる、という滑稽。

◎**わかとくこうのほとそしらるゝ**　「ほと」は、白石本は「ほう」と読めるが、誤写であろう。「得業」は、優れた学僧に与えられる階級の一。南都では、興福寺の維摩会、法華会、および、薬師寺の最勝会の三会で、竪義（ゆうぎ）（探題の出す難問に答える僧）を勤め終えた者をいう。「得業」という名に価しない実態のほどが、自分でもよく分かる、というのであろう。ただし、判詞は、「得業」という言葉は、「業」を引き出すために用いたまでで、特に意味はない、と解しているようである。その解に従えば、この下句は、自分の悪業の深さが知られる、という意味になる。

◎よく思よせたり　「思ひ寄す」は、あることを思いついて、題意に関連づけた表現をすること。

◎なら法師は得業になるゆへにや。されと、たゝこうにこそ侍れ。とくはいまより所なきにや　奈良法師の縁で「得業」と言ったのであろうが、実はただ「業」と言いたいに過ぎないから、「得」という部分は他の言葉と照応していない、というのであろう。「寄り所」は、縁語・掛詞などの修辞（三十番語注「より所ある歟」の項参照）。

◎わかたつそまの月にをよふへき所こそおほえね　「我が立つ杣」は、歌語で、比叡山の別称。最澄が根本中堂建立にあたって詠んだ歌、「阿耨多羅三藐三菩提のほとけたち我が立つ杣に冥加有らせ給へ」（新古今二十、釈教）に端を発する言葉で、その後、慈円が、「おほけなくうき世のたみにおほふかなわがたつそまにすみぞめのそで」（千載集十七、雑）をはじめ、何度も歌に詠み込んだことが、この言葉が比叡山の別称になっていく上に大きく関与しているようだ（島津忠夫『百人一首』）、という。比叡山に及ぶほどの月の名所は思い浮かばない、と自慢するのである。

◎もろこしの月よりも見所あれはこそ、かすかなるみかさの山とはよみつらめ　安倍仲麻呂が唐で、「あまの原ふりさけ見ればかすがなるみかさの山にいでし月かも」（古今集、羈旅歌）と詠んだとされることを言う。この説話は、『江談抄』、『今昔物語集』などにも見えて、広く流布していた。「三笠の山」は、奈良の東方にある山。山法師が歌語を用いて比叡山の月を褒めたのに対抗して、古歌をもって三笠の山の月を褒めたのである。

〔絵〕

山法師は、鎧の上に僧衣を僧綱領（こりょう）にして着、腰刀を差す。左に薙刀。

奈良法師は、鎧の上に僧衣を着、腰刀を差す。左に大太刀。

〔参考〕

○　あらはすもかくすも法の外ならで
　雲よりうへにたかきおほひえ　　〈多々良政弘〉　　（新撰菟玖波集）

○　わかれて末もたえぬ山水
　大ひえや法のながれのひろき世に　〈入道親王尊伝〉　（同）

○　そまてふ山のおくかすかなり
　おほひえや法のともし火かげふりて　〈専順〉　（同）

○　大ひえや峯は土さへ名も高し
　こまやかなりや法の理り　〈忍誓〉　（顕証院会千句、五）

○　君が千とせをいのる法の師
　あをによし奈良の都に寺立てて　（異体千句、四）

○　闍伽むすぶ三井涼しき鐘の声
　のこる御法の大比えの山　（名所千句、六）

○　ひらりと坂を逃ぐる奈良児
　般若寺の文殊四郎が太刀ぬきて　（竹馬狂吟集）

○　高き山をばまかりてぞゆく
　新発意が延暦寺へやまゐるらん　（同）

○　山の大師ぞ川にながるる
　行く水にじかくは跡もなかりけり　（同）

○　山法師こそ後家入りをすれ
　薙刀を野太刀のさやにさしこみて　（犬つくば集）

○　長刀を東司のそばに立て置きて
　比叡山法師高野うぐひす　（誹諧連歌抄）